昭和十四年八月十五日印刷
昭和十四年八月二十日發行

源氏物語總釋第六

著者　篠田太郎　山岸德平

發行者　東京市中野區江古田一ノ二〇五四　篠田太郎

印刷者　東京市小石川區林町四一　小谷實

佐藤太郎印刷製本株式會社

發行所　東京市中野區江古田一丁目二〇五四番地　樂浪書院

電話中野七〇九二番
振替東京八〇〇四七番

宿

木

篠田太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

その頃藤壺と申す方は故左大臣家より上られた女御の御事であつた。うへ様がまだ東宮であらせられた頃に、他の女御達より前に入内せられたので、御仲も睦じく、御寵愛も殊に深くおはしたやうだが、幾年たつても中宮におなりなさるといふやうな深い御寵愛のしるしもなかつたばかりか、中宮（明石）には多くのお子様がそれぞれ御成長なさるのに、藤壺にはお子様の運も少くて、たゞ姫宮（女二の宮）お一方おありになるだけであつた。中宮に引け目を感ずる御自身の運命を口惜しく嘆かはしく思ふかはりには、この姫宮だけでもどうか將來幸福な身にしてあげたいものであるとて、大層大切にお世話申してゐた。姫君は御容貌も美しくいらせられたので、うへ様もいとしくお思ひであつた。女一の宮（中宮腹）を類ない有様に御愛撫なさるので、一般の氣受けこそ女二の宮の及ぶところでなかつたが、内々での御愛撫はさう劣つてはゐなかつた。故左大臣腹の女御になむおはしける。まだ春宮と聞えさせし時、人より前に參り給ひにしかば、睦まじう哀れなる方の御思ひは、殊にものし給ふめれど、その徵と見ゆる節もなくて年經給ふに、中宮には、宮達さへ數多、許多大人び給ふめるに、さやうの事も少なくて、唯女宮一所をぞ持ち奉り給へりける。我がいと口惜しう、人におされ奉りぬる宿世、歎かしく覺ゆる代りに、この宮をだに、いかで行末の心も慰むばかりにて見奉らむと、傳き聞え給ふ事疎かならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひ聞えさせ給へり。

女一の宮を、世に類なき様に持て傳き聞えさせ給ふに、大方の世の覺えこそ及ぶべうもあらね、内々の御有様はをさ〳〵劣らず。父大

臣の盛んな勢力の名殘もひどく衰へてゐないので、格別經濟上に不自由なことなどもなくて、侍女達の容貌や姿のよいのを選み、その衣裝調度も怠りなく季節季節のものをお調へになつて、流行のうちにも奥床しい風にお世話申してゐた。

さて姫君の十四におなりの年、御裳着の儀を行はうと、春のうちからひたすら準備を急いで、何事も並々ならぬやうにと思召された。昔からお里方に傳來の寶物なども、この折にこそ使はうとて捜し出して大層準備をしてゐられたところが、夏頃藤壺は惡靈に惱まされて、はかなくお亡くなりになつた。うへ樣も云ひがひのない口惜しさをお嘆き遊ばすのだつた。情深くなつかしみのある氣立ての御方だつたので、殿上人どもも「これからはこの上なく淋しいことだらう」と惜しんでゐた。一般の身分低い侍女達までもなつかしがらぬはない。姫宮はまして御若いだけに心細く悲し

殿上人どもも「こよなくさうゞしかるべきわざかな」と、惜しみ聞ゆ。大方さるまじき際の女官などまで、偲び聞えぬはなし。宮はま

臣の御勢嚴しかりし名殘、いたく衰へねば、殊に心許なき事などなくて、侍ふ人々の形姿より始め、弛みなく時々につけつゝ、調へ好みて、今めかしくゆゑゆゑしき樣にもてなし給へり。

十四になり給ふ年、御裳著せ奉り給はむとて、春より打始めて、他事なく思し急ぎて、何事もなべてならぬ樣にと思し設く。古より傳はりたりける寶物ども、この折にこそはと捜し出でつゝ、いみじく營み給ふに、女御夏頃物怪に煩ひ給ひて、いとはかなく亡せ給ひぬ。言ふ甲斐なく口惜しき事を、上にも思し歎く。心ばへ情々しく、懷かしき所おはしつる御方なれば、

い思ひに沈んでゐられるのを、お聞きになつて、うへ様はお氣の毒に思召されたので、御七々日がすぎると内々で御引取りになつて、毎日お部屋においでになつては御世話遊ばすのであつた。姫宮の黒い喪服姿はます〳〵美しく上品に見うけられた。御性質もすつかり大人びておいでになつて、御母女御よりも、も少しもの靜かにおちついたところがあるので、うへ様は御安心遊ばしはするものの、實際は母君の御實家とて後見と頼むべきしつかりした伯父君などもなく、僅に大藏卿、修理大夫など云ふのが居るが、藤壺とは異腹の兄弟であつた。特に世のうけが重いわけでなく、身分も貴からぬこの人々を頼り所になさるのも、女の身には心苦しいことが多からう、それがかはいさうだと思召されて、御自分だけで御世話してあげねばならぬかのやうに御心配遊ばして、安らかな時はおありでなかつた。

して若き御心地に、心細う悲しく思し入りたるを聞召して、心苦しく哀れに思召さるれば、御四十九日過ぐるまゝに、忍びて參らせ奉らせ給へり。日々に渡らせ給ひつゝ見奉らせ給ふ。黒き御衣に窶れておはする様、いとゞらうたげに貴なる氣色增り給へり。御心様もいとよく大人び給ひて、母女御よりも、今少し靜やかに、重りかなる氣色の勝り給へるを、後安くは見奉らせ給へど、誠には、御母方とても、後見と頼ませ給ふべき、御伯父など様のはかばかしき人もなし。僅に大藏卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりけり。殊に世のおぼえ重りかにもあらず、やんごとなからぬ人々を、頼もし人にてものし給はむも、女は心苦しき事多かりぬべきこそいとほしけれなど、御心一つなる様に思し扱ふも、安からざりけり。

清涼殿の御庭の菊が霜の爲に色づいて盛りの頃、空も淋しく時雨れるにつけて、うへ様は姫君のお部屋においで遊ばして亡き女御の御事などお話しなさるに、おほやうな中にも幼なげなく御返事申上げるのを、かはゆく思召されるのであつた。又、こんな人柄を認めて、大事にしてくれるやうな智もないことはなからう、とも思召された。朱雀院が女三の宮を六條院源氏にお讓りなされた頃の事などお思ひ出しなされて、最初の間はあきたらぬ緣談だ、他にもつとよいお相手もありさうなものと申上げたこともあつたが、御子の源中納言薫が特にすぐれたお方で萬事御世話申してゐるからこそ、女三の宮は昔の御聲望が衰へず、立派な御有様で今日まで暮して居られることもお出來になるのだ、もし薫がいらつしやらなかつたら、宮の御身の上に不慮の失態なども生じて、自然に人から輕んじられるやうな事もあつたのだらう、などと思し續

ごとなき樣にては永へ給ふめれ。

御前の菊移ろひ果てで盛りなる頃、空の氣色の哀れに打時雨るゝにも、先づこの御方に渡らせ給ひて、昔の事など聞えさせ給ふに、御答なども、おほどかなるものから、幼稚ならず打聞えさせ給ふを、美しく思ひ聞えさせ給ふ。斯樣なる御樣を見知りぬべからむ人の、もてはやし聞えむも、などかはあらざらむ。朱雀院の姫宮を、六條の院に讓り聞え給ひし折の定めどもなど、思し出づるに、暫しは、いでや飽かずもあるかな。さらでもおはしなましと、聞ゆる事どもありしかど、源中納言の、人より殊なる有樣にて、かく萬づを後見奉るにこそ、當時の御覺え衰へず、やんさらずば、御心より外なる事ども

けて、ともかくも御存命中に姫君の將來をおきめになつて置きたいとて、さま〴〵御考へになつて見ると、やはり順序通り薫を聟にするより外に聟として適當な人はなかつた。薫なら姫宮達のお傍に聟として並べて見ても不釣合なことはあるまいし、元々愛人大君があるとしても、そのため本妻につらくあたるといふことは全然あるまいし、結局は本妻を持つことになるだらうが、本妻のきまらぬ前に姫宮の御事を、それとなく話して見ようかなどと、折々思召すのであつた。

姫宮と圍碁などなさつて、暮れゆくまゝに、時雨の趣き深く降る頃、菊花の色も夕映へして美しい有樣を御覽遊ばしていらしたが、人をお召しになつて、「唯今、殿上に誰がゐるか」とお問ひなさると、「中務の親王、上野の親王、源中納言薫がおいでゞござります」と奏上する。「では、中納言の朝臣にこれへ」との仰せであつたので、薫は御前に出た。まことにかく特別に御召出しなさるだ

ともかくも御覽する世にや思ひ定めましと、思し寄るには、やがてその序のまゝに、この中納言より外に、宜しかるべき人また無かりけり。宮達の御傍に差遣べたらむに、何事も目覺しくはあらじを、元より思ふ人持たりとて、聞きにくき事など打まずまじう、はたあめるを、遂には然樣の事なくてしも得あらじ。然らぬ前に、さもや仄めかしてましなど、折々思召しけり。

御碁など打たせ給ひ、暮れ行くまゝに、時雨をかしき程に、花の色も夕映したるを御覽じて、人召して「只今殿上に誰々か」と問はせ給ふに、「中務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣侍ふ」と奏す。「中納言の朝臣此方に」と仰言ありて、參り給へり。げにかく取分きて召

けあつて、遠くから薫る香を始めとして、人品も世の常と異なるものがあつた。「今日の時雨は特にのどかですが、こゝでは喪中で音樂などもやる氣にならず、大層退屈してゐるが、暇つぶしの遊戯にはこの碁がよからう」と仰しやつて、碁盤を出して、薫にお相手を仰せつけられた。いつもかやうに御側近くに召してお相手を仰せつけられるのになれてゐるので、今日も亦そんなことであらうと思つてゐると、「いゝ賞品があるけれど、簡單には渡されないものです、で、他に何をあげようか」などと仰しやる御樣子を、薫は何と見てとつたであらうか、ます〳〵畏まつて居た。さて三番の碁の中二番は薫の勝となつた。「いま〳〵しいことだ」と仰しやつて、「今日まづこの菊花一枝折ることを許さう」と仰しやつたので、薫は御返答も申さず、庭へ下りて美しいのを一枝折つて來て、

墜世間並々の家の垣根に咲き匂ふ花ならば勝手に折りとりませ

出づるも甲斐ありて、遠く薫れる匂より始め、人に異なる樣し給へり。「今日の時雨、常より殊に長閑なるを、遊びなどすさまじき方にて、いとつれ〴〵なるを、徒らに日を送る戯れにてもこれなむよかるべき」とて、碁盤召出でて御碁の敵に召寄す。いつも斯樣に、氣近く馴らし纒はし給ふに慣らひにたれば、さにこそはと思ふに、「よき賭物はありぬべけれど、輕々しくは え渡すまじきを、何をかは」など宣はする御氣色如何見ゆらむ、いと心遣ひして侍ひ給ふ。さて打たせ給ふに、三番に數一つ負けさせ給ひぬ。「妬き業かな」とて、「先づ今日はこの花一枝許す」と宣はすれば、御答聞えさせで、下りて面白き枝を折りて參り給へり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

うけれど、御前の花――姫宮――ではそれも出來ませぬ

と奏上したのは用意深いことと見える。

霜に堪へかねて枯れた菊――藤壺――ではあるが、殘りの色

――姫宮――はまだ色あせずに居りませう

と、うへ樣は仰せられる。かやうに、その後も折々遠廻しに仰しやるお心持を直接に承りながら、いつもの癖で、急いで應じようとも思はない。「さて、この姫宮の聟になるのは私の本意ではない、大君や夕霧が私に與へたくて、さま〳〵に仰しやつたあのいとほしい中君や六の君のことすら聞入れずに、永年の間すごして來たのに、今更姫宮の聟になるのは、まるで僧侶が還俗するやうな心持がするだらう」と思ふのも少々をかしい。あの姫宮にはわざ〳〵思を焦がす人さへあるのだとは思ひながら、これが中宮の御腹だつたらなあと心の中に思ふのは、あまり僭上すぎると云ふものである。

世の常の垣根に匂ふ花ならば心のまゝに折りて見ましを

と奏し給へる、用意淺からず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど殘りの色はあせずもあるかな

と宜はす。かやうに、折々仄めかさせ給ふ御氣色を、人傳ならず承りながら、例の心の癖なれば、急がしくしも覺えず。いでや本意にもあらず、さまざまにいとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過しつゝ年經ぬるを、今さらに聖やうの者の、世に還り出でむ心地すべき事と思ふも、且は怪しや。殊更に心を盡くす人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしもと覺ゆる心の中ぞ、餘りおほけなかりける。

このことを左大臣がほのかにお聞きになつて、「六の君は是非薫にやりたい、薫の方で澁々でも、こちらから眞劍に持ちかけたら、遂には斷りきれまいと思つてゐたのに、これは又意外なことになるかも知れぬ」と、口惜しく思つたので、「兵部卿の宮だつて又特に熱心だといふほどではないけれど、絶えず折ある毎に風情ある御手紙を下さるのだから、よし、宮の方では一時の慰みにもせよ、そのうち緣があつて本氣に愛が湧かないとも限るまい、水も洩らさぬやうに濃い愛情をそゝいでくれる男を聟にきめるとしても、低い身分の者に娘を娶つてもらうのは、外聞も惡いし、ものたりない氣もしやう」などとまで思ふのであつた。「今は末世で娘を持てば誰も氣が氣でない、うへ樣さへ姫宮の御爲に聟探しの御心配をなさる世に、まして私どものやうなたゞ人では、娘盛りをすぎさせてしまふのは困ります」と不平らしく仰しやつて、中宮にも、六の君を匂の宮にあげたい旨を眞劍におせがみなさる

かかる事を左大臣殿仄聞き給ひて、六の君はさりともこの君にこそは、澁々なりとも眞實に恨み寄らば、遂にはえ否び果てじと思しつるを、思ひの外なる事出で來ぬべかめりと、妬く思されければ、兵部卿の宮はた、態とにはあらねど、折につけつゝ、をかしき樣に聞え給ふ事絶えざりければ、さばれ、等閑の御好色にはありとも、さるべきにて、御心留まる樣もなとかなからむ。水漏るまじく思ひ定むとても、なほ〳〵しき際に下らむはた、いと人惡く、飽かぬ心地すべしなど、思しなりにたり。「女子後めたげなる世の末にて、帝だに婿求め給ふめる世に、まして直人の盛り過ぎむもあいなし」なと、諦らはしげに宣ひて、中宮にも眞實に

ことが度重なつたので、中宮もお困りになつて、「左大臣があんなに眞劍にあなたを聟にと永年望んでおいでになるのに、聞入れないで、にげてばかりいらつしやるのは、あまり情を知らぬやうではありませんか。親王達は外戚次第でよくも惡くもなるものです。それにうへ樣も段々御老年におなりなので、御讓位の御考へがおありですから、あなたが御世繼にきまるかも知れません。ただ人だつたら本妻がきまつてから他の女に愛情を分けることはむつかしいでせう、それでもあの左大臣などまじめな顏をしてゐながら二人の女を並べて互ひに羨むこともしないやうにうまくやつてゐるではありませんか。ましてあなたは思ひ通り御世繼におなりになつたら、澤山の女がお傍にゐたとて何の不都合がありませう」など、例のやうにもなく長々と語りつゞけて、尤もらしく六の君をお勸めになるが、御自身も元より全くいやだとも思召さぬことゆゑ、とんでもない事だとばかりに、强いてお斷はりもなさら

恨み申し給ふ事、度重なりければ、聞召し煩ひて、「いとほしく、かくおふな〳〵、思ひ志して年經給ひぬるを、生憎に遁れ聞え給はむも、情なき樣ならむ。親王達は御後見からこそ、ともかくもあなれ。上の御世も末になり行くとのみ思し宣ふめるを、直人こそ、一方に定まりぬれば、又心を分けむ事も難げなめれ。それだに、かの大臣のいと實だちながら、此方彼方羨みなくもてなして、ものし給はずやはある。ましてこれは、思ひ置きて聞ゆる事も叶はば、數多も侍はむになどかあらむ」など、例ならず言續けて、あるべかしう聞えさせ給ふに、我が御心にも、もとより持て離れて、はた思さぬ事なれば、强ちには、などてかはあるまじき

ない。たゞ夕霧の聟になつてしまふと、あまりに立派なきちんとした邸にとりこめられて、今迄氣樂にしなれて來た身が窮屈になりさうなことを、迷惑に思召して、何だかいやになつたけれど、まつたく夕霧からあまり怨まれるのも工合が悪からうなどと、段段弱氣になつてきたやうである。それでも元來浮氣の方なので、按察の大納言家の紅梅の御方をも思ひ切らず、花紅葉の折々につけて御文を送りつゝ、いづれの姫君をもゆかしくお思ひになつてゐた。しかしこの年もこんなことの中にすぎてしまつた。

女二の宮の忌服もすぎたので、もう何の憚ることがあらう。「あなたからお申出なされば、お許しなさる思召がおありのやうですよ」と薫に告げる人々もあるのに、あまり知らない顔をしてゐるのも、すねたやうで失禮にもなるだらうと考へ直して、然るべき折につけては、意中を洩らすやうなことも時々あつたが、うへ樣がそつけない御返事などなさらう

さるべき便りして、氣色ばみ聞え給ふ折々もあるに、はしたなき樣にも聞えさせ給はむ。唯いと事麗しげなる邊に取籠められて、心安く慣ひ給へる有樣の所狹からむ事を、なま苦しく思すに、物憂きなれど、實にこの大臣に、餘り怨せられ果てむもあいなからむなど、やう〳〵思し弱りにたるなるべし。あだなる御心なれば、かの按察の大納言の、紅梅の御方をも猶思し絶えず、花紅葉につけても宣ひ渡りつゝ、何れをもゆかしうは思されけり。されどその年は替りぬ。

女二の宮も御服果てぬれば、いとゞ何事にかは憚り給はむ。「さも聞え出でばと思召したる御氣色になむ」と、告げ聞ゆる人々もあるを、餘り知らず顔ならむも、僻々しう無禮なりなど思しおこして、

筈もない。二人の結婚の日取りをお定めになつた由を人づてにも聞き、薫自身もさうしたうへ様の御様子も拜見してゐるけれど、心の中には、惜しくも亡くなつた大君の戀しさ悲しさばかりが忘られさうにもなく思はれるので、あゝ、こんなに宿緣の深かつたあの人がどうしてあれほどうちとけずにすぎたのだらうと、不審に思はれるのであつた。卑しい身分の女でも、大君に少しでも似てゐる人ならば心を惹かれるであらう、昔、漢の武帝が炷いたといふ反魂香の煙の中にでも、せめて今一度逢ひたいものだとばかり思つてゐて、女二の宮の方のことなど、いつがその日かと急ぐ御心もないのであつた。

夕霧の左大臣は匂の宮と六の君との婚禮を急いで、八月に擧式のことにきめた。二條院にゐる中君はこれをお聞きになつて、「やはりさうだ、どうしてこんなことが起らずにすまう、私はどうせつまらぬ身の上だから、きつと物笑ひになるやうなつらいことがはなどてかはあらむ。その程に思し定めたなりと傳にも聞き、自ら御氣色をも見れど、心の中には猶、飽かで過ぎ給ひにし人の悲しさのみ、忘らるべき世なく覺ゆれば、うたてかく契り深くものし給ひける人の、などてかは流石に疎くては過ぎにけむと、心得難く思ひ出でらる。口惜しき品なりとも、かの御有様に少しも覺えたらむ人は、心も留まりなむかし。昔ありけむ香の煙につけてだに、今一度見奉るものにもがなとのみ覺えて、やんごとなき方様に、いつしかなどは急ぐ心も無し。

左の大殿には急ぎ立ちて、八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方には、聞き給ふに、さればよ、いかでかは。數ならぬ

起らうとは、かねて思ひながら日をすごしてゐたのであつた。浮氣なお心だとかねて聞いてゐたので、たよりなく思つてはゐたが、傍にゐると特につれない御様子もなく、ほんとに深く愛して下さるばかりであつたのに、急に今迄とかはつてつれなくされたら、どうして平氣でゐられよう、たゞ人の夫婦のやうにまるで緣が切れてしまうやうな事がなくとも、どんなに氣がかりなことが多くなるだらう。やはり私は悲しい運命の女だから、遂には宇治へ歸らねばならぬであらう」などと思ふにつけ、あのまゝ宇治で朽ち果てゝしまつたのよりは、一旦京へ出て、今更棄てられたからとて歸るのは、宇治の人々の思はくも恥かしいと、かへすがへすも故父宮八の宮の御遺言に背いて草深い山莊を見すてた輕率さを、恥かしくもつらくも思ひ知るのであつた。「亡き姉君大君は何事もはきはきせず、たよりないやうにしてゐられたが、心の底はこの上なくど心輕さを、恥かしうも辛くも思ひ知られ給ふ。故姫君の、いとしどけなく、ものはかなき樣にのみ、何事をも思し宣ひしかど、心の底の有樣なめれば、必ず人笑へに憂き事出で來むものぞとは、思ふ思ふ過しつる世ぞかし。あだなる御心と聞き渡りしを賴もしげなく思ひながら、目に近くては、殊に辛げなる事も見えず、哀れに深き契りをのみし給へるを、俄に變り給はむ程、如何は安き心地はすべからむ。直人の中らひなどのやうに、いとしも名殘なくなどはあらずとも、如何に安げなき事多からむ。猶いと憂き身なめれば、遂には山住に歸るべきなめりなど思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山賤の待ち思はむも人笑へなりしかと返すがへすも、故宮の宣ひ置きしことに違ひて、草の許を離れにける

つしりと落ちついた所がおありであつた。薫の中納言が今以つてお忘れなくお嘆きなさつてゐられるさうだが、もし姉君が御存命なら、又この宮のやうに他の女を思ひつくことがあるかもしれない。そんな目には遇ひたくないものだと、深くお考へになつて、いろいろ薫から離れる工夫をして、尼にならうとまでなさつたのだ、今御存命なら必ず尼になつてゐられるであらう。今から思へば何といふしつかりしたお心がけだつたらう。父宮や姉君の御靈も私をどんなに輕はづみな者と思召すだらう」と恥かしくも恐ろしくも思ふけれど、どうせ無駄なことゆゑ、自分のかういふ氣持を宮に知らすまいと思うて、こらへて、六の君のことは何もしらぬふりをして、すごされたのであつた。

「匂の宮は常よりもしんみりとなつかしく晝も夜も中君と語らひになつて、この世のみならず來世までもかはらぬ愛情を御約束なづしやかなる所は、こよなくおはしけるかな。中納言の君の、今に忘らるべき世なく、歎き渡り給ふめれど 若し世におはせましかば、又斯樣に思す事はありもやせまし。それをいと深う、いかでさはあらじと思ひ入り給ひて、と樣かう樣にもて離れむことを思して、容貌をも變へてむとし給ひしぞかし。必ずさる樣にてぞおはせまし。今思ふに、如何に重りかなる御心捉ならまし。亡き御影どもも、我をば如何にこよなき淡つけさと見給ふらむと、恥かしう悲しく思せと、何かは、甲斐なきものから、かかる氣色をも見え奉らむと、忍び返しつゝ、聞きも入れぬ樣にて過し給ふ。

宮は常よりも、哀れに懷かしう起き臥し語らひ契りつゝ、この世のみならず、長き事をのみぞ賴め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook